

WCS 用稲新品種「つきすずか」の栽培実証

要約

WCS 用稲「つきすずか」の移植時期及び施肥量について、地域慣行法と県農業再生協議会作成の「つきすずか」栽培暦（県栽培暦）の方法との比較を行った。その結果、栽培暦の方法は地域慣行法と比べて、「つきすずか」の収量が増加すると共に、籾の重量が減少することが明らかとなった。

○ 展示のねらい

縞葉枯病への抵抗性を有する WCS（ホールクロップサイレージ）用稲の新品種「つきすずか」について、栽培・調製技術を実証する。

WCS用稲「つきすずか」の移植時期及び施肥量について、地域慣行法と県農業再生協議会作成の「つきすずか」栽培暦（県栽培暦）の方法との比較を行った。

区	品種	栽培方法
対照区（慣行区）	つきすずか	地域慣行（移植日：6月20日、窒素施肥量：7.4kg/10a）
供試区（栽培暦区）	つきすずか	県栽培暦（移植日：6月10日、窒素施肥量：11.4kg/10a）

○ 主な成果

表 坪刈り調査結果(調査日:令和元(2019)年10月7日)

区	草丈(cm)	稈長さ(cm)	乾物全重(t/10a)	乾物籾重(t/10a)
慣行区	135.6	120.3	1.47	0.21
栽培暦区	148.2	137.5	1.64	0.12

- ・「つきすずか」の草丈及び稈長は、栽培暦区が慣行区に比べて高い値であった。
- ・乾物の全重は慣行区の 1.47t/10a に対して栽培暦区で 1.64t/10a と高い値であった。
- ・両区共に稲縞葉枯病の発生は認められなかった。



写真(左)慣行区 (右)栽培区

- ・乾物の籾重は慣行区の 0.21t/10a に対して栽培区で 0.12t/10a と低い値であった。

○ 今後の方向性

畜産農家における稲 WCS の普及が進まない要因として、籾の割合が高い従来型品種の給与による飼養牛の体調悪化の事例があったことが考えられる。籾の割合が低い「つきすずか」を地域に導入することによって、畜産農家における稲 WCS の利用が促進されることが期待される。しかし、「つきすずか」であっても移植時期と施肥量が適切でない場合は品種本来の特性を發揮することができないため、県農業再生協議会作成の栽培暦に従った管理を徹底する必要がある。

実施機関：河内農業振興事務所経営普及部 実施場所：宇都宮市

問合せ先：栃木県農政部経営技術課技術指導班 TEL 028-623-2322 FAX 028-623-2315